災害福祉講演会

# 被災後の健康支援強調

## 元岩手県宮古市長 東日本大震災の教訓伝える

東日本大震災の教訓を伝える熊坂さん＝20日、市役所

宮古地区医師会（竹井太会長）主催の地域医療対策事業「災害福祉講演会」が20日、市役所2階大ホールで行われた。講師を務めた元岩手県宮古市長の熊坂義裕さん（社会的包摂サポートセンター代表理事）は、東日本大震災の経験から医療・福祉施設、行政機関などは安全な場所にあるべきとして、津波時にはハザードマップに照らした高台への誘導を強調した。被災後は「終わりが見えない、先が見えない不安」の人たちの健康支援のために「よりそいホットライン」を立ち上げ、全国からの相談を受けるなどの取り組みを行っている。

同講演会は、宮古島でも過去に大きな地震、津波（明和の大津波）が起きていることから「もしもの時」に備えた対策、発生したときの誘導や発生後の心のケアなどについて理解を深めようと実施。嘉数登副市長があいさつし、市の職員や消防署員などが耳を傾けた。

熊坂さんは「東日本大震災から12年が経って思っていること―元宮古市長として、医師として、大学教員として、よりそいホットラインの運営責任者として―」の演題で講話した。

２０１１年３月11日に福島、宮城、岩手の３県を中心に発生した東日本大震災の死者、行方不明者数は１万８千人余に達した。熊坂さんは押し寄せる津波で破壊された建物などの写真を見せた。津波による犠牲者の半数近くが「逃げなかった、（家に）戻るなどした」との説明もあり、津波が来たときの判断の難しさを語った。

復興の市町村格差では▽宮古市は岩手県で最大の建物被災戸数だったが、復興が早いと言われたのは行政職員に犠牲者が出なかった▽市民性（過去に何度も津波被害を受けている）▽市町村合併の効果が発揮された▽基幹産業の電子産業の被災が少なかった（雇用が守れた）―を挙げた。

災害後は長期にわたる身体と心の健康支援が重要であることも強調した。「最愛の人を亡くした時、誰しも『もしもあの時、こうしていたら死なかったかもしれない』と自分を責め続ける」と話した。被災者のなかには身体と心が破壊され、亡くなる災害関連死も多かったことについては「救えたはずの命だった可能性が高い。東日本大震災を始め、過去の災害の教訓が生かされているとは到底言えない」とも語った。